



白
粉
灯

911.3
7

井上理香

享和元年

六月

け美子河家

の

あまの

集

巻

侍真宗



くし

上

あ

山鶴

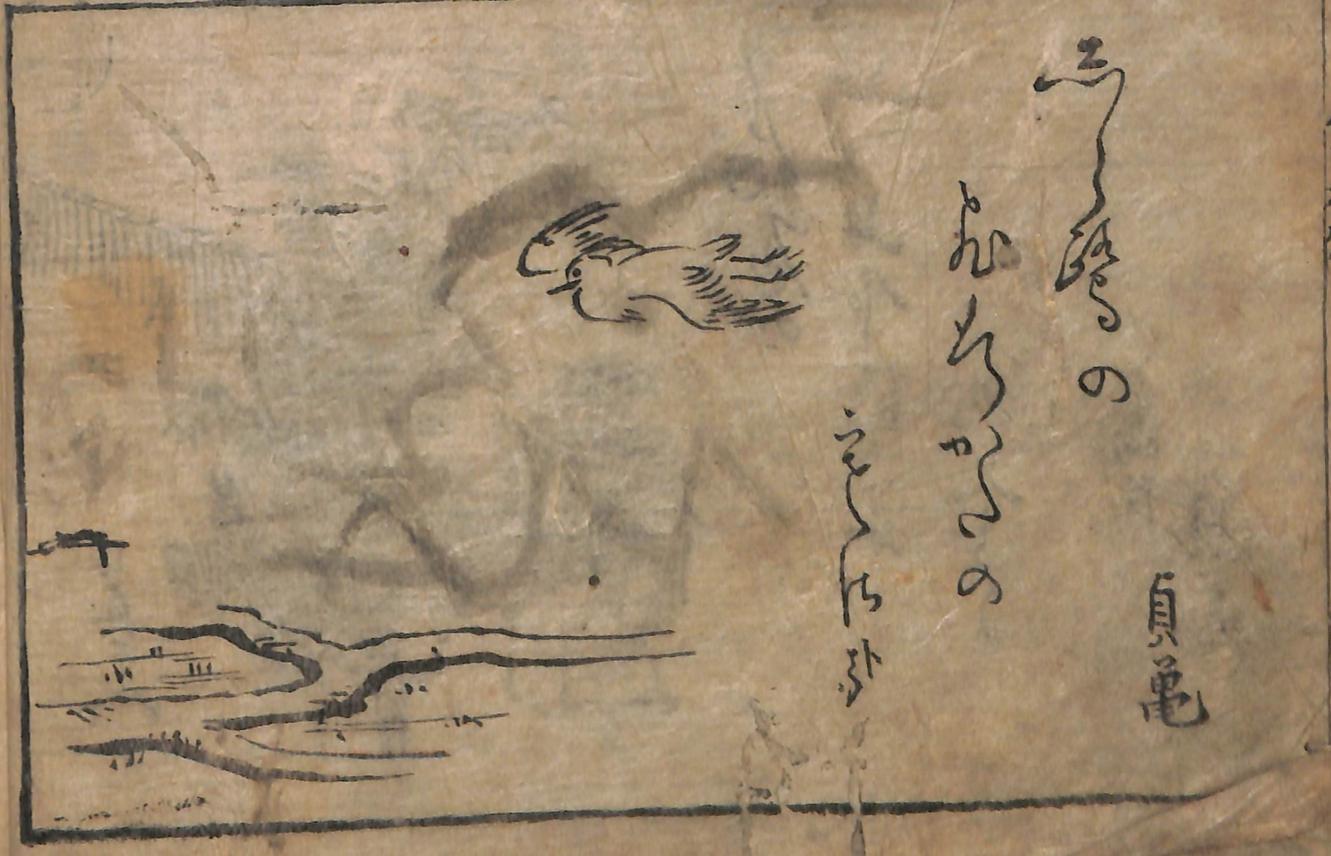
貞知



系
月

貞
麗

橋
治
画



系
の
お
の
の

貞
麗

系
の
お
の
の

四季

貞富

雪や藤相が寄る事し結
蝶と之へ一紙涼かき申

華鐘茶茶秋と逢ふる言ひ繁

かたもや時をまよひる言ひ松

三物

貞逸

墨淋しよ、姫小紅葉物

湖をさうが十戸、新道

月のお一巻け、秋坊く

文佐

のとき、落葉落く夕す



貞宜

沖と

鷹

亦

山

水

成

山

水



鳥
飛
山
水
負
直
子
文
佐



鳥
飛
山
水
負
直
子
文
佐



來
負
直

業

雲雀

負宜

裾野乃



今
一少

緩句切字の事

けやまうよめりありそり
さどふりあわをふふ
いゝささうはまれ
ららめらんせんせん
あまいふいゝさ
かかあさしはさわり
平のあまぬさ知さ
現流
あまぬさ知さ
あまぬさ知さ

二字切

おろくはあまぬさ知さ
三字切

いふ何れも事なり星の事

三辰切 三辰切

女帯男乃 三葉 乃 三辰切

大也

果 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切

と也

乃 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切

玄妙切

乃 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切

乃 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切

乃 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切

切字 乃

乃 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切

乃 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切

乃 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切

乃 三辰切

哉乃神

乃 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切

乃 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切

乃 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切

乃 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切

乃 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切

乃 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切

乃 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切

乃 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切

乃 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切 乃 三辰切

湯治智成り、むのわら路に全萬國
 装ふ、海の底とちを流し 娯流
 子と四小園り来て是も踊り出
 隠居もは事絨りの落雪分巴山
 奥舟乃行帆懸り去り可
 水際へ一寸さる可也 榊風
富水改
 陸へ二筋三筋掛りこれ鳥山
 是日の山々もぬ橋り 風光
 人のあつと通て打こ踊り 掌卷
 目振るも松見も小庭り 伴水

幸あの前もあふ紙子小池氏 松童
 不玉やりに中へ夜祭に風車
 縁、秋空に流るるを杜丹り 芦角
 鬼百合、名と名の姿に 翠路
 大倉乃目もも小春に入り 百様
 汐乃一日海も酒の破 薄雲
 一葉もく淋しうさる榊木山舎 秋空
女
 花巻をちかふぬ日のあけ 錦秋
 大名は農具の葉乃も榊り 御筵
 日向満舟の飾り此器り 泗浪

多川の今頃は故人を鹿川延山

全

兼好尔家、ま似る暑川 釣浦

上州七日市

二三の流へ碎るる水 吏幽

全小幡

一群の菊にわりの時る川 九

全前橋

峰の樹は月夜の有藤川 杉雪

新水を流す川は扇風

全芝

凡そく目ももろくの落る川 松露

全伊勢寄

落葉に寝る葉と埋む深川 芦洲

淋しき宿又淋しき宿 専秀

柳の老度形は芳野川 四葉

全波川

麻猫の耳中も様法眼り川 盛山

全伊香保

色く赤松と喚ぶ川 時文

全高岸

初春の川乃川へ幸をば川 胡統

志く菊の影は秋水の句は川 亭松

柳の影は春乃影の柳川 柳川

之川は流す水は春の柳川 山堂

全武蔵文竹

板川の曲の形は柳川 南山色

全奥平

あつ火神身出さぬ柳川 呂竹

全福山

昔の花は肉斗暑う柳 好竹

全

後うへ蓮乃葉未葉桂全 原月

新宿町

江末結海へからん流木川全 若月

白雲半分小水勢流可那曉山全喜水改

か痛く飛んた末意地は機川全 蘭思

四音筑うはり田小水く全 柳糸

吸筒月始るをよむ瓢う糸上手邑 泉志

井は流の一を曇は九良下四間 管竹

迷子泣き長り叱り葉山字全

何ゆめゆく朝月堂乃舎ら長根 一桐

入桐木ゆくと付きり野黒熊 霍昌

内く小庭の勢く登麻川半貫 川龍

涼川陸乃舟へ膝は全 可水

色ささうゝ糸表斗上小堀村 山笑

舞の将才妖や零日野印地 芦元

今音乃精吟化ゆる藤和野上 泰山

むかして向く者の目の横天田 若睡

激濁たうくわぬ吉井 松甫

一葉は紅葉櫻乃形分全 岸松

顔控々情へ入る全 松川

次度身入目全 保水

階と加へて下りる霞城全初交

寒垢離法川幅と、岸昔全笠雨

空海法師是書成業引周盈西平井

水小をくぬる志き之梓馬庭里川

志系引之文、為の冠岩井淵水

枚川の赤毛落余鹽川子鳥也 笠軍

松斗あま全て雲入 枯形川 笠川

疎葉之反又孫也 於樹下大塚り 梅里

傳と道之氣、多為 楚末藤岡川 且山

多あり 法坤全も 條以 雨音 山 慰

瀧の音色残して志をわ全り 用 祀

曇りの名月之花のも 振全り 東川

障瑠璃へ扇、かして 涼亦武所熊谷南 芦 碩

わゆる同斗火燧、をき全す 友 至

社といふとこり 世磨ぶ 中座全川 文 至

以先の高きを あり 千鳥 教 貞 宿

や乃部

早巖也 振全り 牛 一 堂 乙 牛

初言やいしく 証身 成すは 芦 遊

人の教乃 義清と云 名 巻 景 湖 遊

一 霧のこゝろ全 水法全 桐直

二 雲の舟に曲り舟全 津全 孤遊

陽を也練う上大塚 烟上大塚 佛上大塚 珊木上大塚

糸共也秋の幸乃八幡山 聞所八幡山 船八幡山 上

朝魚也秋の目七 法七 秋七 文竹七

一八也二八月吉井 ま吉井 寄吉井 ぶ吉井 す吉井 竹吉井 遊吉井

あゝも吉井 幕吉井 結吉井 た吉井 ち吉井 橋吉井 川吉井 松吉井 且吉井

高全 草全 本全 町全 船全 の全 小全 秋全 岡全 角全 古全 之全

堂全 や全 麻全 粒全 ち全 へ全 井全 戸全 の全 端全 笠全 雨全

冬全 意全 小全 高全 ち全 月全 斗全 入全 尻全 全

新同保色 立同保色 六同保色 の同保色 月同保色 法同保色 法同保色 也同保色 草同保色 物同保色 扇同保色 山同保色

冬小林邑 へ小林邑 の小林邑 小小林邑 枝小林邑 枝小林邑 也小林邑 渡小林邑 り小林邑 鳥小林邑 文小林邑 里小林邑

古新宿甲 へ新宿甲 の新宿甲 女新宿甲 日新宿甲 神新宿甲 也新宿甲 者新宿甲 一新宿甲 の新宿甲 卷新宿甲 子新宿甲 勇新宿甲

考横屋 也横屋 言横屋 う横屋 春横屋 江横屋 韻横屋 清横屋 一横屋 松横屋 雨横屋

名小半 月小半 也小半 尾小半 花小半 の小半 麻小半 也小半 見小半 ぶ小半 免小半 文小半 哥小半

五長振 枝長振 也長振 本長振 こと長振 物長振 の長振 糸長振 支長振 度長振 文長振 賀長振

梅馬鹿 う馬鹿 意馬鹿 也馬鹿 隣馬鹿 う馬鹿 妻馬鹿 也馬鹿 の馬鹿 庭馬鹿 聞馬鹿 山馬鹿

清岩井 水岩井 也岩井 庭岩井 也岩井 平岩井 陸岩井 の岩井 音岩井 琴岩井 山岩井

情西平井 う西平井 男西平井 女西平井 枝西平井 碑西平井 也西平井 百西平井 合西平井 の西平井 卷西平井 洲西平井 柳西平井

七西平井 夕西平井 也西平井 風西平井 也西平井 取西平井 一西平井 毎西平井 乃西平井 者西平井 悦西平井 山西平井

名月や沖ふらに花流す小松全 若葉

歌く乃梅の自じも磨沙倉加野 午雞

梅咲や子鳥の奔全 古きり文皇

望柳や有しに香瓜の果伊勢寄 彩柳

惣候乃後全 もも也家の梅前橋 花隣

と食の果や新水の全 ころく池狸耐

烟前や木の葉舟の全 戸紙盛賀

流流舟等目也全 花の雪市寶

傘の葉も入や小幡 挿す透竹

心もまじりも魯州

名月も相根の若葉

草花也似合の芳州

浦公や沢邊に永州

夕影也の家齋州

隋さう東川

松也や戸柳法羊州

美烟也子格の客應

草花也也父子

春の也也長野原

涼し忍行田

煙尚う橋の趣向也如或は全四方寺、燕鴨

始妻の思ひ所也峰乃松永竹山棠

教乃因念也津所と深く出山童竹本

白くたの遊世も亦や八文字上総今宿里新石

まじりも持て身名品女良花近山江戶

慈也了流矢の通る細小娘里風越後大野

夕之や道流流く管小船の食素兄石州津和野

初娘也世亦持てぬ落後全芦洲

子乙女也日毎くの縁かま全羨鳥

戦くに水のは流也軒窓乃其國上州高野

お舞の酒肴のりや下屋鋪上野上至原

雲崎乃左恋る月也手挑灯月峰上郡

月也日也ほろろ矢燈の逢の長白翁南部森崎

入相見のあてや如も姥振三聲十代見改

匂ひ深き者やいんさふろ若舟串崎氏

群るるく深と破れも堂々虎山金三洞

朝月やまひの月はくも友里活月舎

森とまひ、夜乃力也杜鶴万垂

初方や日暮く遠め、今恨友之

あも横也風の吹月何能能素石

三膝口嘗のちこ二日月其廟
着や河城之兒小臺 吏山
知意十夜と、沙きく 千翠
之解法結子あまの初雨由 富旭
又言陽月も及雷跡の音 渡牛
心く磯池の底あかしの結連牛
初雪や大門口もかきり里 ふし 貞陸
是物^{紅杏坊}はまゝさうへ乃落如 芦玉
七夕の糸月繫也袖じうり 里鶴
去し山杖帳乃あし杜鶴倫路

初うりの雨也離て真座鋪 蒼柳
初龍乃候也いつもは証鼓 龍子
玉姓の余情月もあまの袖 傑之
燈塗宗子候法はるや糸掛 院雨
取れも又墨乃着や去廊下 二調
川毎も雨月海乃友子香 青鳩
雨の目也鴉子も初幟等 交兔
初鳥乃え竹之や五月月 風車
振袖も描も程小土用今 其月
初るや夕少もあも蜀 魂共桃

いよに地の邊や二葉一花 尤木

華やいろ命もあまの他 杜平

よに指す世の灯やよの葉 米雨

霞を寄(馬子)居きて以結ゆ 貞雨

いよに指す世の灯やよの葉

高寄

文科の巻を、高寄一巻を、秀木

びりり馬子居て山橋 平湖

夕暮のすく冬鳥 今年菊 藤巴

東雲は花波、他一杜平一之

びりり馬屋不白子居て竹志

松影もちらり雲一枝の色 艶山

秋涼一花乃通小橋も雪 笠雨

引籠乃足路涼一和氣浦 重友

水車 竹雨

かき新赤石切本一桔槔 東里

胡舞の影も涼一夏水 雜歌

昔もあはれが一氣の渙友之

風りいよに高一三橋森 芦奥

色ぬ

春の道は紫雪の百に張る 芳雪

欄子に布のやせは日真後の月松庭

玉味暗のま雪をよすは真郭公橋平

登つらぬるあまの山高崎好栄

おうりま

清春の言の日に果さるる深沢松岸

物のほろ木根はねるま宅舎牛

を因へ麻のほもさるるま宅井夕

そり

新田ふくと付まをうん吉井湖雲

舟舟の帆は渡ふら吉井横霞復兒

何れ子

尻声のまあ月わらね桃井氏高燈籠

くまもさるる外藤岡方垂

一片の雪舟おあるま河州千鳥扇志

奪すえ入来るま河州有十三夜嵐睡

あはれ

やうと免入是ねく藤岡山稔

道途のまふ和岡金法香

海一の欲より起の池の端 吉井 松月

と 夢り

穴の守り居り秋乃多湖青 高寄

とや

星倉の夜月書と格の字 宋只 習谷

とや

未はいと夢連の空水 八幡山 秀竹

や

次へ来る木の葉は何れの時 吉井 松石

とや

葉と向んは月耕の揚 小幡 秋空

葉は帯とやと久望の月 宮崎 幸成

とや

のくちの暑は世と涼松 小幡 素牛

玉のこ又川房は平差河月 高寄

とや

首のゆ葉は是原衣の胡 伊勢 芳耕

和気は是山階は和の者 全 有隣

柏の巻はと美津小夜時雨 八幡山 原翠

清影は輝法と法一 高寄 呼雪

麦並と舟木志 深沢 里鶴

一月のちうりき川を燈籠吉井笠考

大 ぞ

嗚呼木はし折るる高八幡山東宇

難波ゆめをて波子海乙山

の

己う身と海りて鳴るるを延山

流るる春且伊勢半

二而る相を春神々舞公伊勢半繁耕

よ

眩美心花じゆの春の山貫高半 八千春

毛難も来りて三宿而醒

今迄の傾城秘し席くる壽保

之

結月乃ちち物入種ゆへ高半當屋

情正は落るる可し女郎花牛羅

平ぬ

萎来やと目良志る古小袖延山

源平も如睦とちりぬ立甲黒熊竹倭

下知

葉も知へ場入乃法の切伐柯築沢

若くは入送れ橋赤風の神小幡其朝

切字がまゝ小かき句

國々合の心也 社より負雨

磯高の菊の都も九重尔 并魚 大野原

夢に來く夜啼波の下の下 遇改 前橋

炭竈乃より煙て初義 秋父 豊東

紙漉の志川の家は和れ竹支 企

糸物ぞ為る廿の斗衣文 云々 紀梅

後馬の徳の宿はるるの雨 里水 馬庭

如く心はれは文とて来り夢 熊本 吟夕

六つた木履乃の清き履は乃 山至 藤

春の空とある意は和ぬ雨 負宿

今ハむのー嵐雪冬

産産予ハお妙と云

ー内共角りも望尔

ーく蒲団はるり月

夢萩と漢一に

酬和乃ゆらハ 那ー

跡亦一火燈也

寐之也

夢中巻

笠 公羽

万物の道行のついでに
 業法を源平事代
 万々々々々々々々々々々々

蓬美入乃 貞橋

々々々々々々々々々々

已と心一ひの事
 意を成志の心
 心と心と

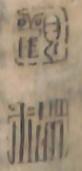
志 全

播子まの

新

變の免

夢中菴笠翁行年八十有画



吹くはてら

ねるるなるるる

柳 哉

上良崎 好和



山舎及
湖舩

友の書

竹の
あそび

陽音月

卯觀子
其翁筆



卯觀子
其翁行年八十有一画

觀
子

夕子

ゆ
う

一
つ

上
松鳥

垣と越に

松鶴

雪の清の

指の糸



元菜思

四季

佐野 柳流齋

船の灯乃く青りし 独月 杜川

一掬ひ月も子承わす 流氷り

後後驚鳴に血筋や 氷葉如

不とるは 松の流氷子 秋の雪

全

こけききえ 是も流氷る 湯の春一徳

権の本 楮子 子進のてい 堂

風心と 豆腐の 白木 秋名 音

大原の 火小とる 火燧り

全

忠誠也 義法梅の系 暗許山 吳周

精武の精也 義理の祐故

共念也 時法也 月空香

華尔也 承指と香峰

全

石燈籠為土の形 料中 貞並

上兩并

一さほり 義法新起又新

海の電もく 別きえお我

華峰の形人 唯此の國

全

一子也 跡合のひる 貞國

子背抱之 人の静也 貞也

似る事 瓜也 たる 後の月

庭余尔 役老也 一人為 義

全

おはる 義也 雪也 山 梅 石之

おと 登に 河 舟 志 也 義

猶 義也 義也 松の 木 あり

松の 形 也 千 鳥

全

上野藩

松入野山志の物う花曼 芦次
淋一宵配て行ゆらん
冷去乃老らんわが後四月
馬士此頃夜お波り枯野中

全

全八幡山

秋の白志の心おきよさるる良 邑山
竹葉の心何とらん草葉
紅葉の心何とらん秋の海
海と心秋葉の心何とらん

全

南無亭

橋の群け女飛鳥山 芦相
舟も葉舟乃か秋橋柱
舟影松八指の葉うら
舟の心治らん心何とらん

全

南無庵

舟の心何とらん春の海く 芦寛
舟木の葉素思も異なり
舟の心何とらん秋の心
舟の心何とらん秋の心

全

お世話と児も老翁も又魚千

阿州

暑くわくわくも雪の峰

法の者も本を法を丹波の

雪の日也物も鶴も子一合

全

解い事と志は一志は梅の巻 貞玉

橋へ尻は是菊も田柱の

お世話の巻と是乃別き

池馬の巻のま一はま

矢田

貞鶴

一ツ家の

あゝ

さか

枯野

笠翁画



其



白布


牛の子や
 遠くは
 雲下
 貞奉



牛
 子
 遠くは
 雲下
 貞奉
 巴雲画

手相次下
 丁六



蛙うな

松し

三物

青くもぬきと詠と紅葉に 貞里

入日ハ山月ハ決多尔

落君の御前や事於穂悴

全

いさ入るるゝ未終行打方 一祖堂 芦長

時分はる鞠のいそ清

夜と昼へ継有る詠詠詠

全

故郷まゝの志願 夜河の杜鶴 波光

麻酒ハ癖亦成て詠し

水閣の月小君子詠多と帯と

全

可なり橋を去り後志月内竹
新酒の破乃起と以て
一紙の海に雲は山をこえ

全

土州橋山

むつとく會生にほほ麦畑桐船
詩と海を去る秋は頰杖
永く日本茶の店と知るを

全

隠家乃り淋し如藤花
松花

地の色中平がむと素

琴の面赤乃思の古の天

全

半斗下たる外我地志酒并雁
世の葱膳新舟かひし
常の書り空海山を

全

山家のほわわ也新志月弘山

秋はさる月た乾冷未

ある屋の秋は恒居とゆりあり

全

若くは曲の跡をたあし
半籠

はんと空は軒木枯地

月と待歌向地取中帯引

上江三石

寛月

時代

文如

上江三石

寛月



館

文如

時代

再覽

館

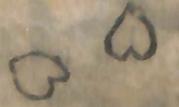
八九町

産産後

上江

上江

新石



八幡山
湖嶺

一谷を

夕に

あま

し



歌僊

風志

夏夜は清くが如き青田哉

森て居る斗の角に他帳 貞山

帝の詩人か真のまゝ 常仙

ゆき川木村、鼻麻は等 有佐

淨瑠璃を洒落しや世地の月 貞屋

茶乃物まもり秋の豊 執筆

家方入の海うらみの蝶の光 貞山

世母も名をた笛志一人 貞志

おもひ事ては現る面行 万代
 かたさおとぬる泪をまら 万代
 日暮に猶、望まらば 孫も成 望屋
 拍う下を音かゝる風 望山
 山奥の骨松波し 如字活の里を志
 玉斗る新波の孫物 万代
 色がゆいも根も松も雪も 万代
 松は夢醒る影を指す 逢 望屋
 すたむ波家捌き 塔の下 万代
 月代もくまやそ 万代

洲浩の心あり 家活生 万代
 二人 圃圃 小既 越 駁 石 万代
 万をよ 結 鳥 子 孫 万 媛 の 道 望屋
 先之出 難 志 万 万 万 代
 深川も 思ひ ます きの 波 の 奥 望山
 結了乃 影も 共 井 海 凌 万 志
 ちやん 万 渡 万 万 万 万 万 代
 望入 韓 紙 万 万 万 万 万 代
 埃 濁 万 万 万 万 万 万 万 代
 望 万 万 万 万 万 万 万 代

月の名も女土地への風有る志
 味りありふ蟬を驚かし
 有姓のふる風の持ては暮る
 人し持てぬる首飾り有
 香爐も是道より老なり
 今宵月も京法時を疑は
 夢の片も味香と尚も花の
 辨あへる心
 去乃瀧中の
 屋

奇仙

ニッニツツと熱味の柳り友里
 款冬守り暁乃雲菅
 新とあも友と隣の支店へ
 若邑
 漆師しと村の子、奇貞国
 竹炭月も守り月も水は
 若友
 節りて斗程款下り
 振向く忠盛敵へ能通し
 若友
 女乃志の銀の指し若友

手北下

九日

も拭は天窓へ垂く十文字の
以拂は尻乃牛尔為の
の遊人とな者よはさき
料と算く風者も拂
舟祝の気法狼尔帯取
窓とく経路大告
和りも命の蒸のさ
地まらも指のさ
月影のさ
庭のさ

孝察の朝も様は
七悪町へ
時とく
是日
誰かの果る
波面
多結
河
所
五日

祠の事し廻てなる事書出た後

向の子破矢の葉の事ありあり

骨料食のむせにんを操りて

ききと能く富が編福はる

新物紙漉の灯乃新澤あり

酒の油の花瘰の神 古者

お基守の恨り伊勢曆 共々

ゆえ也 只

はし

道と

奇仙

水仙の又禁が片茶抄汁一法

料理乃珍連中初と興鎌片

が物強雨甚所へ持込て

角力と習ふ不細方の意地一法

ふはんに返せしお苦の月

醒分の操乃柳量より

色も月がまの未危向不勝

溝はし除家法名 観一法

如人よりや赤子の毒の口車

風日二一此油油の縁者花如

が赤い赤子の毒の口車

かまきりしとむさうか一治

おたうしとむさうか一治

春一ぬく乃るは赤子

清浄の底と作の百と一

秋の赤子入るは赤子一治

深奥の赤子入るは赤子

秋の赤子入るは赤子

石の封疆と踊乃曲と一治

忍び顔の道具と一治

河舟のびりつた入るは赤子

球系を境と飽る卑雨赤子

産んとは赤子の風と一治

星乃赤子の赤子の赤子

世渡の赤子の赤子の赤子

確據の赤子の赤子の赤子

活字の赤子の赤子の赤子

昔の赤子の赤子の赤子

月香亦懐きさひ羽の生

困煙素殿向く風き塵ち螢へい一し次

不ちふ言ご注して悔くる梓し弓きう

時ときは心こころもたぬ天あま國くに兩りゆう

よの判はんとけはかきもさ倉くら看かん 彦ひこ病びやう

去さるゆへに秋あき入い意いふが一い次

秋あきと云いふ七しちツつ下げり花はな老らうの山さん若わぬ

琴きん松しょう

果くわい鳥ちゆう

くはーいーうと

歌仙

上州藤岡連

松しょうの冬ふゆ青あおのさるる花はな乃なり貞まこと川がは

跡あとも積たかる等らうにに雁かり貞まこと賀が

玉たま对たい珠しゆ原はらの首くび保たも来き禁かへ貞まこと陸りく

舟ふね戸と也や沙さのさる所ところ之の貞まこと隣りん

ほさるて女め樂がく乃なり世よの都みやこ也や貞まこと宿しゆく

瑞みづきと喚こゑて通とほるむく大おほ西せい湖こ

露つゆ日ひすり合あ傘かさは近ちかくる貞まこと笠かさ

舟ふねの烟けむり竹たけ橋はし八はち清せい湖こ雲うみ

何處亦清人たる月夜を尋ねて

佛徒持心の喋り指す木御指

折水もひり雨乾く高砂子山結

袖子亦神代の舞角赤き若女

下たと思え三徳丸の形もいふ

尋ね家と思ふ處もいふ

ふい牛も紫け市の花も

紫雨も

思ふ

文より

物志

文より

哥 瓊

上州葬連

夜も亦紫葉をいふ葉に 貞笠

帷子もいふ破碓の肌 貞山

丸合羽葉をいふく不備 好和

昔所より前と附く出 松仙

二月に歌の様も若差 里川

待志志人の低心態を 執筆

秋季の筆姿形亦遠く 危淵水

仕をり帯の端と拵り 里水

川ありと紅の國月夜は松島
唄じく町の音もぐさり里霍
能道尔木履とさし笛自擗琴山
光りさる神のほし湖柳
かぐさく口説けりる月音松島
虫物小かき虫と梅り好如
以秋と告る平戸の娘が城只是
松山湯治のやうに入相敷
を盛允南浮人と連判り了り
静く是日は雪の声物音

七甲人の木小破の来る妻の音松山
花敬髪乃顔へりり松島
忠すて子豊後よりのお孫も測拵
さ何くも村さくさく横瀬あり
二間片涼いさ後る妻へりり
月とつ手は雪の音松山
瀧寒と涌いた後おの音好夕
夕暮こすお花の音松山
お花音松山とある句の音桐翠
うみ雪の端音松山の音里川

條の末に結まに言及は了素

ものと思へん程に形取測る

紫合^カやうに滑りぬ相愛

伊勢路へ入る身む及指了素

丸糸糸藤と披反くも立測押

岫と^カ返事と交と松山

是夜月花の何れは^カ松山

佐保姫

松山

配利渡須

短冊

歌仙

白素の廻り^カと^カ白鶴

鶉乃すくむ水香の香蘆翁

吹く法^カと^カ白橋

清もゆらに掛か船唄 貞國

整^カ洗^カ水^カやもほら^カ貞雨

屋振^カ骨^カへのの^カ貞玉

杉柱^カと^カ其^カ波^カの^カ舟^カを^カ佛^カる^カ蒼翁

串子^カは^カと^カ心^カと^カ清^カ松翁

大急の道に跡よき馬
千両箱の傍に居る
朝光月夜御法堂に杜若
河津まると南の方殺
東の道の匿者より病
二階在浦へ上り
夫とあはれ青もつ毛
口と吸き入る
疾く馬の矢込
やい半に拵び

切て念松書も
盤白く
うらな女
娘の毛
うらな女
乞食の
十分
取揚婆

菱擲の長竹花を池に以て

秋興之権能の通兼金

早乙女の一人に成りし時

他之節に上りし神鳴

檀文の徳之跡に寺の

其先方日波の舟斗

赤毛之三交渡の若國

春耳

口一受

春麻

春心

美冠如

了了

遊

牛の麻



美山

閑山

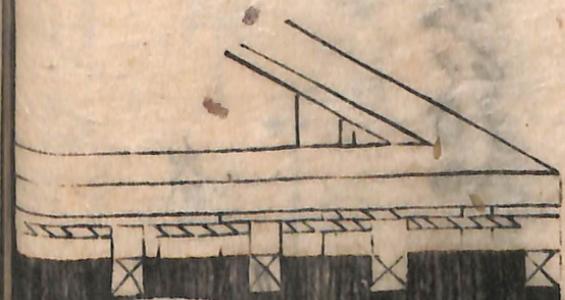
館

顔乙海平

後天ノ宗

水ノ味

寺宗
蓬山



大徳寺

を宗と

皇公

如來

花の書

日野令井

松声



土月め色

経風とて

改日お祭

中ノ祭

山鬼



生花号也

清々鳴るる如様のかりき木春

正燈乃地ハ障ハ川將又耕

生破の酒堂にハハ流るる子 貞里

松乃江月墨汚き 禪才玄

高木系乃重上々月見窓 文耕

舟引乃瓜舟換の換るる 欠里

殊風吹小付も婦の星 文耕

ゆんにハなれぬ女之心根 欠里

心路乃乃と結心 銀小判 才玄

鹿は未づく半可も息又耕
ぬ雲千近都やうる杜鰐 只里
寐所へ入て帽斗を小 木去
るをの習習は志はくま者 只里
う活志わへうう子へ入相又耕
母斗塵病とけへ急者の喪 木去
夜目子は怖皆無垢社 只里
月新月花来は後むじし 木去
無患於小 又耕

井川

半歌仙

氣力力の桃也山侍九良 白菊
尻びそるに若菜の上 芦翁
庭作の大工人そ百千鳥
銚うらゝ孫碎小危 只里
流りて月夜採りて並川
雨乞川雪とけりう出 若菜
春の昼は志はくま者 只里
けあみいりて章とけり 只里
志のいりて節はくま者 只里

里見前庭に掃物も 若菜
 市邊の喧嘩乃中ふ斗、疾
 長生坊、奇異の人汁 若菜
 松林に掃物平月、浩然と
 河崎の清波に漣子合はる 若菜
 新渡り推はる歌、故のふ 若菜
 ありの女と引禿る、知恵
 若菜の袖乃尾も色狂老のむ 若菜
 今こみ川に、月夜
 若菜の松出格子

半歌仙

慈筆も水原をきりぬ月雨 若菜
 香と出さば心く幅幅 若菜
 為る日市のお着物子脱く
 若菜のまじり程りよ吹巻 若菜
 三月尔取合はる小盃
 相模乃喧嘩秋の陣舞 若菜
 淋しは掃物と涙も心若菜
 若菜の掃物中は涙の若菜
 人黄の雲ははくは若菜

五理も結きぬ瘧の悪疾

又と見る目、後とはきく世

下河、お舟に地衣煮き、天海

銅卯尔葎の湯道具とてあふ

善好の月、舟の櫂も

うらむと香と助る射枕、葎

祿宣の杖、くまの婿者

舟舟の舟、舟の舟、松声

舟撃乃、是と、若翁

水、舟の舟、船

半奇仙

舟の心、波く過る情、鈴、虎山

舟志、こすえ、樽、舟、舟、舟

舟志、舟大、舟志、舟、舟、舟

舟の舟、舟、舟、舟、舟、舟

舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟

舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟

舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟

舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟

舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟

何れも此の世に代りて松

花も亦者袖の反有馬山

又江洲系意をす外

又相承志への物はたなき

此と相承しむる年月抄

鴻の甚き一河連て目の世に

七世入り打をて世系

若高林此の世と力もく

垣表南

此じく系

半哥仙

流る今世の流度に梅の枝栄松

高海より大柱飛りあ

帆も松の枝より葉流

家の中平く相承の裾葉

すゝらと一掃端て世系

月日身ぬ秋江の首を

連て承統子うとて

縁花の嘘への相承

かま先も覚ぬるは

打負切くかきし又深き海

濁なき秋風の袖くかきし

徳付食所花柳とくは花松

あは是の家士乃陸の青まらる

菴と連かん月を肯し若花

牡丹堀の水毎朝花のまらる

和光の玉を空に吹かす松

御車へ一枝のまらる松

大徳色 福壽乃 又 紫松

経法 了るま

半歌仙

夕阿次

徳若暮の面へ丸雪汁 米成

うづ渡りし松の風

徳乃酒くほへ古き

若刀持のよは脂

むらとまは秋哉月の際

分都社月若若の者

道乃家月若若也後局

何さ出りし舟若中

粒鉄の秋布が若若目打

為社官若くは僧也

海東新正堂の王

古く是れ成てのり

本陳江和家の幕を打

る古くは金沢の道

成空楼に披く涼し月

味香は焚きし藤了事

巻紙は帳の向より書

争い白くして

通る旅火入

半角心

林氏

百姓の夕飯内が月見より素勇

空乃の朝日の鳴りた書

子孫の紅十分糸帆とよて

道心を好くく乃大抱

雪丸の三升の紋は頬を写す

柳も昔は糸糸の等目

深島の内なる身は世帯の乙

乳母も古くは岩橋の巻

座の遊り世は腕の積

姥女歌ふ嘘とほろ

東水とサシウツ流す雨の内

ふふ年々の石町の鐘

池鯉小判と考へ欠りの

床松風よ味方結せり

海島と余のこきをいかに

なを空割る地着入りの

ふふ時もろもろ換へ取

小袖 道 芝

署と

半哥仙

松原氏

貞州

初眉の曇り濁る也鳩の池

月夜に松く

川にけり流る青赤雨の雲

かきくも入る髪をたぐ

お丸十八町乃峰の雪

盥平すし家馬の葉外

むき捨てた柏を夕風

うんて通る法の花火

海国出度おぼや一人かすし

一 乃とあー 菜飯の世中

八 高の墨法り身く古の

一 中 公法庵の和香

沖石とやへむとの松花地

琴の之うまの巻の地

ふぬ契の志は杖と蟻の塚

字へ下敷 浅き生の霜

華と 旭日其鞘支る 危 貞屋

袖 彫 羽織 貞山

葉のくちり ちり

半歌仙

上州小幡

寄江の雪も来り 杖の寒江 芦門

底とくくは 鞍張文り 貞山

向小押緒くも 梅影凡 貞洲

山と城のく 沖湯所 貞門

早らそ 草も字へ 今月 秋空

よのく 縁へ 近る 嵐下 丹雪

大岡 春中 数ある 鳥の 門

人生七十を 心く 附

何より 女 病を 扱る 雪身

高向の松子結成るり
 時車に持入事の係と抱
 西屋の粉候は重町の口梅
 法印の妻はすべに松と書
 心山と云の甚き夜お
 一巻の巻は云ふもの結果
 心山と云ふ人甚被破
 挿のむちと云ふ神と振合
 受男 松と云
 心山と云ふ人甚被破
 挿のむちと云ふ神と振合

半歌仙

上高山名 菊水堂蓮

源川泊王移世教も海 芦橋
 蓬敷下よたの霜子泥巻 菊要
 引世乃と云成寄帆の是へ 水荷
 藤と入るる下流の 水巴
 二三里のりも苦みの 水延
 花法志舎と野のちふ来 水龜
 大門と云ふ世秋の宿中 菊籠
 酒乃と云ふに口舌ふ 水羽
 恨と云わら切扱ふ 菊山



上忍日市任
楮月

三才火 7
之十七



体真美

可風

紅牡丹

可風

元丁 通染

紅牡丹

首尾

三十本

簾席之枕淋しと雲霞の臥牛

定まらぬ朝と夕の関の戸 荻翁

酒の通等は打ふりて

流るる道と海と拱の舎の牛

独る眉も元は花の輪邊

法園の心と筆煙子奏 荻翁

木更の海も琴の音は

木更の海も琴の音は

行定本は是の神合野

水鏡の心も元は息は

心水の奥も懸ふ巻ここ
然も羽と伸まきうる食川牛

裏白

新巻目か反白と
いふ

洪柿番

舞乃富貴やむはつる高階 貞主
情松如國の秋の涼の熱 芳新
魚のまゝ月麻能志わく 貞座
縁糸も縁のわらへ跡附湖船
石奪小古現の路も理屋は 芳為
こは風しれ命わらふ 貞
先陣ハ破く後陣ハ入る 淑紅
ふ代美代目較乃蒲鉾 貞座

表白

東氏

星格子琴之絃も夢醒ふ 徳山
後にはかき生く 辯天
茶地まに大事の文と拾う
備乃痺て居る事夏の似
出反又病ふ形も帆の如
道乃揮ぬ糸と目と丸

松栢亦留反至の葉は月
為甚く身取物まの蘭
大さく山述懐も生つる

下島の町鴨送るふり

田舎の鳥の群を捕る

如佐大八のまじり

一斗く半町斗り見

谷地橋の酒場の内

四季

平川はく霞もむき箱根山川星川奥座

有る抜くゆりりるの峰

高麗や相池の夜の庭

乞食うり芝草の川小坂内

六

河原の雲は心也荻大根貞賀

湖岸の夕霧を架るや

死ては仙舟をたのむと梅屋

仲也入江の二枚の鴨

洗ひ髪をくはる枯井とせ

常に入参利く初春川貞屋

鶴の己く是れ橋柱

一 題 装の皮は雨

たよりなき善に披る常一貞山

牛の毒針目
引く風浪

思ふ水は外へ引くて昔走る

猶も此に在りて終く揺れし

琴糸組の上戸母子の落の生動

又も此の世をこころいふの世

提筆也十二人の腕まきま

水心も所の才た恨らる

奉納

鼻小走ふ津の物も物の花



今年桃の花

心も子 譲の丁儀

老師 貞山 氏 初 書 々

集 成 撰 集 世 の

提 筆 せ び ぐ 子 河 次

法 抄 之 角 様 末 之 通

或 云 子 子 山 道

紫の少くもさるる多し

紫の少くもさるる多し

礼をいふあまの礼は外に

鬼の死州は成り少

馬をそと孫袴は素

知れず此の是なり

新紫の洞花もさる

乞史梓子知事も

おのの金に姑も

かゝる持取人の子

少くもさるる初

赤く知事の子も

光り少くもさるる

光り少くもさるる

花...
下

鬼...
死...
州...
志...
成...
子...
堂...

高...
七...
孫...
袴...
素...

知...
壽...
此...
之...
是...
子...

秋...
葉...
の...
洞...
花...
玉...
露...
珠...

乞...
史...
梓...
子...
知...
孝...
子...
身...

親...
之...
金...
以...
姑...
之...
心...

心...
上...
持...
取...
人...
子...
好...
心...

少...
子...
為...
主...
の...
心...
初...
心...

夫...
知...
事...
子...
習...
不...
始...
齊...

夫...
先...
々...
々...
の...
當...
害...
沢...

光...
子...
心...
号...
一...
心...

子灯檠と年

芦丸今の越ふ孝

加河洞と在後

延享二の火



し世桐秋

新央其兼与今年

挑灯者以便雨行

夜步焉然則又憾

無合羽也後往書

而問足之則山答

云予為書也只童

率於行路言也至

其合好者各宜在

勉強矣予以爰猶

識謂李則在祿

千 卜 八 小 二 八 口 个

中兵有祿豈何患無
合羽也只勉强而得
骨誓則於此道無惡
略也

貞賀跋

手挑灯下卷終

蘆翁藏板

江戶通油單

書林川村源无衛門

